

---

## 跡見との出会い



紀井利臣

赴任後24年が経過しました。跡見との最初の出会いは今から50年前、19歳のときでした。当時大学受験のため、通称「浪人生活」の最中で、昼は運送会社で働き、夜に美術予備校で学ぶといった、美術大学への進学受験ではよくある若者の一人でした。私は芸大油画受験で3年浪人しましたが、入学した年の油画科定員50人の平均浪人は3.5浪、現役はゼロ、最長は10浪といった時代で、働きながら受験浪人は当たり前前の時代。私はいち早く運転免許を取得しトラックの中距離運送を担当。ある日、川越街道を東松山に向かう途中、左手に大学らしい校門を横目で見たことが最初の出会いでした。正門の前はまだ砂利だったようで、こんなところに大学が、と思った記憶があります。今は退職された創立当時の先生の話では、最初期の入学試験では教員が皆、雨の中長靴を履いて傘をさし、正門の泥道に並んで受験生を心配そうに出迎えたそうです。

次の跡見との出会いは30歳頃だったと思いますが、お茶の水女子大での美術教育学会の帰りに、同席した人に誘われ、駅までの途中にある跡見女子短期大学に寄り、当時の学長、久保貞二郎先生にお会いしたことでした。戦後の美術教育界には大きく3つの研究団体があり、その中の2つが跡見で「創造美育協会」と「新しい絵の会」です。前者の代表が短期大学の久保貞二郎先生で、後者は新座の鈴木五郎先生でした。全国からこの二つの研究会に参加する教員方が多く、私もその一人で、時折研究会の座長も務めていましたが、久保先生は雲の上の人、今の文京校舎1号館に学長室があったような記憶があります。この時久保先生から、「そのうち跡見に」と言われた記憶があり、まさか本当に跡見で教えることになろうなど考えてもなく、お会いしたのはこの時が最初で最後でした。そのような跡見における美術教育の活動は現在美術教育の礎として残っています。短期大学部には生活芸術学科があり、そこでは美術の高等教育の教職免許は取得できなく、短大で美術の実技を学んだ多くの学生たちが新座の4年制で編入性として教職を履修し、授業は賑わっていました。優しい気持ちを持った学生ばかりで、私の教育持論である「知識より知性」を反映した学生たち、教職についてもその信念は続いている様子で、大変うれしく思っています。

20年以上経過し、教育界も大きく変化しました。人が人に教えるといった対面型から新型コロナの影響でリモート授業へと変化していく中、「知識より知性」が今後どうなるかはわかりませんが、跡見の精神は生き続けることを確信し、今後もご発展をお祈りしたいと思います。

長い間本当にありがとうございました。